

2014年6月22日 野外礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書9章10～17節

説教：分け与える神

きょうは教会の建物から外に出て、公園の芝生の上に座って礼拝をささげております。今読みました聖書でも、大ぜいの群衆たちがイエスについて来たのはいいのですが、人里離れたところでお腹を空かしてしまった場面が出て来ます。集まって来た群衆たちは食事の準備はしてこなかったようです。男だけで五千人、女性や子どもも数えればおそらく一万人ものもの数です。日も暮れ始めました。弟子たちは焦り始めます。このままでは大変なことになってしまう。彼らは、群衆を解散させるようにイエスにアドバイスをします。

これに対してイエスはこんなふうに言われました。13節。「あなたがたで、何かたべる物を上げなさい。」イエスは、弟子たちが一万人分の食事を用意できると考えていたのでしょうか。素人でもわかります。一万人分のお弁当運ぶにはトラックが何十台も必要なはず。それだけのものを十二人の弟子たちが用意できるはずはない。イエスはそんなこともわからなかったのでしょうか。そんなはずはありません。イエスは神の子ですから、すべてをご存じです。となると、イエスは弟子たちが準備できないことを知りながら、わざとこのように言ったこととなります。こういうのを「意地悪」と言います。弟子たちも少し腹を立てたようです。「私たちには五つのパンと二匹の魚のほか何もありません。私たちが出かけて行って、この民衆のために食物を買うのでしょうか。」

もちろん、イエスが弟子たちに意地悪をし

たわけではありません。では、どうしてこのようなことを言ったのか。

そのことを考えるヒントは、弟子たち自身の言葉にあります。彼らは何と言ったか。「私たちには五つのパンと二匹の魚のほか何もありません。」これがヒントです。自分たちの手にあるものと言えば、パンが五つと魚が二匹だけ。これではまったく足りない。がんばればできるかも知れない、というレベルではない。絶対できない。こんなふうにして、弟子たちは自分たちには何もないと言いました。このことを確認させるために、イエスは意地悪と思えるようなことを言ったのでした。こんなやりとりをしてから、次のステップに進みます。

イエスはこう言います。「人々を、五十人ずつくらい組にしてすわらせなさい。」パンが一部の人たちのところにかたよらないように、全員にきちんと行き渡るように、それでこのようにしたことは明らかです。でももしそれだけなら、わざわざ聖書に記す必要はありません。もっと深い意味があるように思っています。このあと、弟子たちがパンを配っていきます。当然、グループごとに受け取ることとなります。イエスが分け与えてくださる恵みのパンは、ひとりずつ受け取るではありません。みんなで受け取ります。そして、みんなで喜びます。神が分け与えてくださる恵みは、ひとりだけで喜ぶのではなくて、みんなで一緒に喜んでいく。なにかそんなことを教えている気がしてなりません。

さて、次にイエスはこのようなことをしま

す。「するとイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて、それらを祝福して裂き、群衆に配るように弟子たちに与えられた。」その結果は、全員が満腹しただけではなく、十二のかごにまだパンが余るほどでした。

さてここで問題です。いったいイエスはどこからこのパンを持って来たのでしょうか。「これは神が起こされた奇蹟なのだから、どこからかはわからない。」だいたいそんな答えが返ってくるでしょう。でもそれで納得しなくありません。確かにこれは、神の奇蹟です。と言っても、何もない所から手品のように取り出したのではないはずです。いったいどこから出したてきたのか。

皆さんもご存じのアンパンマンという漫画があります。その漫画の中に、だれかがお腹が空かして泣いていると、アンパンマンは自分の顔をちぎって与える場面があります。アンパンマンのお話は、非常に聖書に近いのです。パンはどこから出て来たのか。イエスはご自分のからだを裂いて分け与えてくださいました。

そしてもう一つ注意していただきたいのは、何もない所から取り出したのではないことです。イエスは、弟子たちが持っていたわずかのパンと魚を手にとっています。弟子たちは思いました。一万人を満腹させるためには、これではまったく足りない。そう思われていたものが、実は十分に足りる物に変えられる。不思議なことですが、主がなさることというのはそういうことです。

ときどき私たちも大きな問題にぶつかることがあります。どんなに考えても自分の持っているものや能力ではまったく刃が立たない。絶対に解決できそうにもない。そう

いうときがあります。そんなとき、主に祈るでしょう。「助けてください。私には絶対無理です。」主は祈りに応えてくださり、時には奇蹟と思われるようなことさえ起こります。そんなとき、「神さま、感謝します」と言って素直に喜びます。おそらく多くの方はそこで終わります。それ以上深く考えることはありません。でも思い出したいことが二つあります。

一つは、主はなにを用いてくださるのか。何もない所にいきなり奇蹟が起きるのではありません。私たちがすでに持っているわずかなもの。それを用います。私たちの目には、こんなもの役に立たないと思っていること、弱々しく見えるものを用います。ですから、決して自信をなくす必要はありません。

二つ目。主はイエスのもとに集まって来た群衆をどのように迎えましたか。「喜んで彼らを迎えた」とあるでしょう。この人たちに対し、主は満ち足りるほどのパンを分け与えます。それも喜んで分け与えます。私たちには見せないようにしながら、主ご自身のからだを分け与えるのです。何も感じないはずはありません。痛みをおぼえながら、喜んで分け与えてくださいます。

ですから、主にお問い合わせするとき、思い出していただきたい。もし主があなたの願いに応えてくださるというのなら、主は、あなたのためにご自分のからだを裂くことになりました。私たちのいただく恵みは、裂かれた主のみからだであることをともに覚えたいと思います。